

主 題：主の働き手

聖書箇所：マタイの福音書 9章35－38節

今日はマタイ9：35－38のところをごいっしょに学んでいきます。私たちクリスチャンにとって最高の模範は主イエス・キリストです。私たちはイエスがどのように歩んだのか、そのことを学ぶときに、大切なことを知ることになります。実は、この箇所はイエスがどのように歩んだのかを教えています。私たちの最高の模範であるイエスがどのように歩まれたのか？今日、私たちはそのことを学ぶことによって、あなた自身の歩みがこれに沿ったものとなるようにと願います。

A. キリスト者の生き方：どのように生きるのか？ 35節

このような質問をします。「イエスはこの地上にあってどのように歩まれたのでしょうか?」、それを知るための一番いい方法は神のおことばを見ることです。マタイの福音書4章をご覧ください。主イエス・キリストは40日40夜断食をした後で、サタンに勝利され、その後、公に宣教を始められました。つまり、ご自分がいっただれなのかということをはっきりとされたのです。「公の生涯」と言われますが、イエスがだれなのかを明らかにしながら働きを始められた、そのことを記されているのがこの4章です。4：23をご覧ください。「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを直された。」と記されています。ということは、イエスはこのように歩んでおられたということです。

◎イエスはガリラヤ全土の訪問できるあらゆるところを訪問されて、

- (1) 会堂で教え
- (2) 御国の福音を宣べ伝え
- (3) 人々の病氣、わずらいをいやされた

これらを覚えながら、今日のテキストである9章を見てください。9：35には「それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病氣、あらゆるわずらいをいやされた。」とあります。4：23で見たことと同じです。そうすると、このように言えます。イエスは公の生涯を始められてから、ずっとこのような働きをしておられたということです。しかも、この「教え」「宣べ伝え」「いやされた」という三つの動詞はすべて現在形を使っています。主がそのような働きを継続して行っていたということです。

そして、4：23で「民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを直された。」と見ましたが、確かに、そのことはマタイ8章と9章の中に11回記されています。この中に主イエス・キリストが様々な奇蹟を為されたことが書かれています。8章の初めにはツアラアト（らい病）に侵された人のいやしがあります。また、中風で苦しむ百人隊長のしもべがいやされたこと、また、ペテロのしゅうとめいやし、群衆の中から悪霊を追い出され病氣をいやしてもらった人たちがたくさんいたことが、同じように8章の中に記されています。ガリラヤ湖の上で嵐を静めるという奇蹟も8章に書かれています。また、レギオンにつかれた人からその悪霊を追い出したことも記されています。9章には、中風の人のいやしがあり、会堂管理者ヤイロの娘が死からよみがえらされることがあり、12年間長血をわずらっていた女のいやしがあり、二人の盲人のいやしがあり、そして、悪霊につかれた一人の聾者がいやされたことが記されています。

わずか2章の中にこれだけの奇蹟が記されています。なぜでしょう？イエスはこれらの奇蹟をもってご自分がだれであるかを明らかにされたのです。イエスはご自分が神であることを隠しておられたのではありません。会堂で教えるその教えを通して、彼がいっただれであるかを明らかにしました。教えを通して、旧約聖書から預言されていた約束の救世主が自分であることを明らかにしました。そして、そのことを明らかにするために、様々な奇蹟をもって、ご自分が病に勝る力をもっていること、自然界のすべてにまさる力をもっていること、そして、罪を赦す力をもっていること、ご自分が神であることを明らかにしたのです。

ところが、そのような主のみわざがなされると、必ずと言っていいほど、それを邪魔する働きが起こります。9：34を見てください。パリサイ人たちが何と言っているか？「しかし、パリサイ人たちは、「彼は悪霊どものかしらを使って、悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。」と。このようなことは必ず起こります。ですから、皆さんも主のみことばに喜んで従って歩んでいこうとするときに、必ず、それに横槍が入るのです。いろいろなことを言っておびやかす人を馬鹿にするのです。イエスもそうだったのです。イエスはいつも変わらずこのように教えを為し、福音を伝え、人々の必要に応じて来られた。でも、人々

は、そのような働きはすべて悪霊のかしらの力によると言って、神に心を開かないのです。それは自分たちだけでなく、周りの人たちも開かないようにと惑わし続けるのです。

さて、このような悪の抵抗があった中で、イエスは何を為さったのでしょうか？ 9 : 35 に記されています。イエスは何が起ころうと、何を言われようと、常に同じことを為さっておられました。今見て来たように、イエスが公の生涯を始めたときに為しておられたことは4章で見ましたが、このようにイエスを中傷する者がいて、悪魔の力によってそのような働きを為していると言われた後も、イエスは為すことを何一つ変えておられません。同じことを継続されています。

☆主イエスが為さったこと

1. 父なる神のみこころを行ない続けた 35節

イエスは人としてこの地上に来られたときに何を為さったのか？ 人としてイエスは父なる神のみこころに従順に従い続けておられました。そのことを私たちはここに見ます。公の生涯を始めたときも、みこころに沿って歩いておられた。そして、どんなことを言われようと、イエスは同じように父なる神のみこころに従って歩いておられました。言い方を変えると、イエスはどのような状況にあっても、主なる神がお喜びになることを選択し続けておられたということです。イエスの関心はどのようにして神を喜ばせるか？ そのことだけでした。だから、私たちにも同じことが神によって命じられているのです。

思い出してください。パウロはこのようなことを教えています。ローマ 12 : 14 - 21 「:14 あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。:15 喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。:16 互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思てはいけません。:17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。:18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。:19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」:20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。:21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」。つまり、このことをイエスご自身は実践されていたのです。人の悪に対してイエスは悪で応えないで、常に神がお喜びになることを選択して、そのように歩み続けておられたということです。

ですから、私たちも同じです。人はいろいろなことを言い、いろいろなことをするかもしれません。主に喜んで従おうとしているあなたに対して酷いことを言うかもしれない、酷いことをするかもしれない。でも、あなたの責任は変わらないのです。どんなときでもあなたの責任は神がお喜びになることを選択し続けていくことです。悪に負けてはいけません。だれかがあなたに対して悪を行なったからと言って、もし、あなたが悪を行なうなら、その罪の責任をだれかに転嫁することはできません。

ですから、イエスの生き方を見て私たちが教えられることは、どんなことがあっても私たちの責任は神がお喜びになること、神の前に正しいこと、神が望んでおられることを、継続して行ない続けることです。それがまず、私たちが教えられることです。

2. 人々の必要に応え続けた

自分のことよりも他の人の必要を満たすことを考えておられたということです。35節に書かれていること「会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。」というのは、人々のためにしておられたことです。イエスは会堂で、彼らが聞かなければならない、知らなければならぬ神の真理を教え続けました。御国の福音を宣べ伝えたのも、彼らには罪の赦し、救いが必要だからです。だから、イエスは人々にどのようにすればその罪から救われるのか？ どのようにすれば永遠のいのちをいただくことができるのか？ そのことを話し続けておられます。病気やわずらいを直された、このわずらいは肉体的な病というよりも、精神的な苦しみや悩みでしょう。イエスは人々の肉体的なことだけでなく、心をご覧になって、その病がいやされることが必要だとして、そのためにいやしのわざを為しておられたのです。ですから、イエスの働きはすべて人々のためでした。知るべき真理を教え続けておられ、救いが必要であることを教え続けておられ、そして、人々の肉体的精神的な重荷からの解放の必要を知って、みわざを為しておられたのです。

このようにみことばを見ると、イエスがどのようなお方か？ もっと言えば、神とはどのようなお方であるのかを私たちは知ることができます。イエスは人々の外見を見たのではありません。人々の内面を見られたのです。そして、その中にある様々な痛みや苦しみをイエスは理解してくださるのです。あなたが抱えているすべての傷みを全部分かってくださるのです。そして、分かるだけでなく、感謝なことに、それをあなたから取り除いてくださるのです。マタイ 8 : 17 でイエスはイザヤ書のみことばを引用してこのように言われました。「これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。

『彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。』』と。すごいみことばが引用されました。

なぜなら、まさに、このことをイエスがしてくださるからです。つまり、神はあなたの心のすべてのわずらいを分かってくださり、それをあなたから除いてくださるのです。あなたの一番の問題である罪という病を、イエスが代わりに背負ってあなたに罪の赦しを与えてくださるのです。

すごい神だと思いませんか？ここまであなたのことを覚えてくださっているのです。あなたのためにここまでみわざを成してくださるお方です。主イエス・キリストの行ないを見ると、常に人々の必要に応えておられます。ということは、私たちも同じです。私たちも「私の必要を満たしてください」と言うのではなく、人々の必要にどのように応えていくのかを考えるのです。皆さんはそのように生きておられます。人々の必要に皆さんは喜んで犠牲を払ってその必要が満たされるようにと、一生懸命労しておられます。神が皆さんを豊かに祝してくださることを願います。私たちはそのようにして生きるのです。なぜなら、イエスがそうして生きておられたからです。最高の模範であるイエスがまさにそのようにして生きておられました。自分のために生きることは、悲しいことに、天に宝を積まないだけでなく、地上においても豊かな祝福をいただくことはありません。しかし、私たちが人々のために生き始めるなら、天に宝を積むだけでなく、この地上にあっても豊かな祝福をもって歩むことができます。

35節に「**御国の福音**を」とあります。皆さんはこのことばを見てこれはどういう意味だろうと思われたかもしれません。私たちが語っている福音とは別のものなのか？と…。福音は一つしかありません。主イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われます。では、なぜこのような表現を使っているのでしょうか？説明します。御国という以上、そこには必ず王がいます。当然です。王国が存在するならそこには王がいます。ですから、イエスが語られたメッセージは「**真の王、真の主権者**」がいること、そして、私たちはその方によって支配されることの必要性を教えられたのです。なぜなら、私たちは生まれながらに私たちを造ってくださった主権者、創造主なる神を信じていないからです。ですから、イエスの「御国の福音」というのは、私たちを造られた創造主、主権者なる神がおられ、私たちはその方に従うということです。この世界には「王」と名のつくものはたくさんいるけれど、その遥かに上座する絶対的な王がいます。その王に仕えるべきだということです。

ですから、別の言い方をするなら、私たちは王の王である方、主の主である真の神を信じて来なかった。そこで、あなたはその真の王であり、真の主であり真の神を信じてその方に従っていきなさい、その方が支配しておられる王国の一員として、その方に仕える者として、新しい歩みを為していきなさいと言うのです。それなら、私たちが信じまた語っている福音と何も違いはありません。

私たちは主イエス・キリストと呼びますが、この「主」にはこのような意味があります。a. 主人、b. 所有者、私たちが「主イエスさま」と言うときは、イエスは私の主人であり、私の所有者であるということです。パウロはそのことを「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」（Iコリント6：20）と教えています。また、c. ローマ皇帝の呼び名、d. 様々な神の呼び名、ギリシャ神話には多くの神が出て来ますが、そのような偽りの神の称号として用いられました。e. ヘブライ語の「ヨシュア」、「主は救い」という意味のギリシャ語訳が「主」です。ヘブライ語の聖書をギリシャ語に訳した70人訳では、ヘブライ語の「ヨシュア」を「主」と訳しています。

ですから、私たちがイエスを「主」と呼ぶとき、それは「イエスはすべての被造物の主人であられ、すべての所有者であられ、そして、私たちを救うために来てくださった真の救い主である」ということです。ですから、後に、この方の前にすべてのものたちがひざまづくのです。ピリピ2：10、11「：10それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、：11すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」。私たちは当然、喜んでこの方の前にひざまづき、この方を誉め称えます。

でも、喜んでそのようにする人ばかりではありません。意図的にこのイエス・キリストを拒み続けて来た人たちはひざまづきません。でも、彼らの前にも明らかになるのです。このイエス・キリストこそが真の主であられたこと、王の王であられたこと、真の神であり、唯一の救い主であることが明らかにされるのです。そのような日がやって来るとみことば約束しています。ですから、イエスが語られたことは、そのように間違った王に仕えているあなたがたは真の王に、真の神に仕えるようにということです。

☆この福音を通して、聴衆がいかにか「罪深いか」を示す

もう一つ付け加えると、私たちが福音を語るときに必ず起こる誘惑について。私たちは愛する人がこのすばらしい救いに与ってほしいと願うから、彼らが聞かない方がいいと思われることを避けようとしています。罪のこと、永遠のさばき、地獄のことなど、でも、イエスが、また、イエスの弟子たちが語ったメッセージを見ると、彼らはさばきをきちんと語っています。その代表的なメッセージを見ましょう。ペンテコステが起こった後、ペテロが多くの人たちの前でメッセージをしています。使徒の働き2章に書かれています。そのメッセージをしたときに、人々にどのような反応が生じたでしょう？2：36か

ら「:36 ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」、あなたがたが十字架に架けた方は、今見て来たように、主の主であられるお方、神であられ、そして、キリスト、救世主であると言います。すると、人々はこのように反応します。「:37 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言った。:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」（使徒2：36-38）」と。クリスチャンの皆さん、思い出してください。あなたが福音を聞いたときに、何も感じなかったけれど、あるときに聖霊があなたのうちに働いて、あなたの罪深さを示してくださった。自分は神の前にどれ程罪深い者であるか？神がそれを悟らせてくださり、そして、あなたを救いへと導いてくださった。自分の罪深さに気付かなければ、だれ一人として救いの必要性を覚えません。聖霊なる神はそのように私たちにそれぞれひとり一人の罪深さを悟らせてくださるのです。この使徒2章にあるように、そのことがここで起きているのです。

ですから、私たちは人々が聞き易いメッセージを語るのではなく、彼らが聞かなければならないメッセージを語るのです。それは、私たちがいかにこの創造主なる神に逆らい続けている罪人であるか、永遠の滅びに至る者であるかを示し、そして、神がみことばを用いて罪人の心に働いてくださるときに、あなたは彼らに起こったことと同じことを経験するのです。「私には救いが必要だ」と、そして、救い主イエス・キリストの前に救いを求めて出て行くのです。ですから、聖霊なる神の働きは、—私たちが救われたときのことを思い出してください— あなたのうちに働いて、あなたの罪を明確に示してくださるのです。そして、聖霊はその後も継続してあなたがいかに罪深い者であることを示し続けてくださるのです。ですから、キリスト者はその信仰の成長とともに、自分がいかに罪深い者であるかということをもより深く悟っていくのです。あなたの信仰が成長するほどに、神はどうしてこんなに罪深い者をこんなにもあわれんでくださっているのですかと、神に質問し続けるのです。なぜ、こんな私をこれ程までに愛して、私のために救いを備えてくださり救いへと招いてくださったのですかと罪深さを悟らされた私たちは、そこから救いに与り、そして、信仰の成長とともに、私たちは益々自分がいかに主の救いに、祝福に与るにふさわしくない者であることを神によって示し続けられていくのです。ですから、信仰が成長している人たちは、自分の罪深さをより深く理解している人たちです。ですから、その人は自分のことを自慢しません。益々謙虚にされていきます。

さて、35節のみことばは私たちに、イエスはどんな迫害があっても、どんな反対があっても、どんなに中傷されようと、同じこと、父なる神が喜ばれることを継続したことを教え、そして、イエスの関心は人々の必要に応えることであった、そのことを見ました。

B. キリスト者の動機 36、37節

次に、36節からは動機について教えます。イエスがどんな働きを為さったのか？どのように歩まれたのか？それだけでなく、私たち自身の歩みにおいても必要な「正しい動機」について教えてくれます。36節「また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた。」とあります。

例：主イエスご自身の生き方から学ぶ

1. あわれみ：あわれみをもって生きる

イエスはあわれみをもってすべてのことを為されたのです。「あわれみ」が彼の動機だったのです。ここに「かawaiiそうに思われた。」とあります。これはおもしろいことばです。このことばの元になっているギリシャ語は人間の内臓、腸です。「腸」を表わすことばからこの「かawaiiそうに思う」ということばが出てくるのです。なぜ、そのことばを使ったのか？当時の人々は、人間の「情」というものは内臓にあると思っていたからです。ですから、腸ということばからそのようなことばを作るのですが、ここでイエスが「かawaiiそうに思われた。」というのは、単にそのことばを口にするというのではなく、イエスは人間を見て、まさに、心の底から彼らにあわれみを示されたのです。彼らに同情を示されたと言っているのです。このことばからも分かるように、イエスが見ておられるのはあなたの上辺ではありません。あなたの心です。ですから、それを表わすために二つの動詞を使っています。

(1) 弱り果てて：これは「皮を剥ぐ、引き裂く」ということから転じて、「疲れさせる、苦しめる、煩わす、悩ます」という意味です。ある辞典では「疲れ切っている、悩まされている」と訳しています。また、パークレーは「これは果てしない旅を続けて疲労の余り歩けなくなった人のこと」と言います。一生懸命頑張ったけれど、くたくたに疲れて、もうこれ以上一歩も進めない状態です。

(2) 倒れている：これは「からだを地面に投げる、倒す、横たえる」ということで、また、「打ちのめされている」という意味もあります。ある辞書では「落胆している、無力である」と訳すとも説

明されています。

ですから、これらのことばは、くたくたになって疲れ果ててもう一歩も動けませんという状態を表わし、いろいろなことで致命的な傷を受けて倒れている姿です。まさに、私たち人間はそうではありませんか？どんなに自分の思い通りに生きていたとしても、心の中はいつも渴いています。それを満たそうとどんなに努力をしてもできません。イエスを信じる前はみな途方にくれていました。ある人は「これが人生だから仕方がない。これを受け入れなければいけない。」と書いていました。私たちは本当の満足を得ていませんでした。生きていて本当にすばらしい！と言うこともできませんでした。「まあ、あの人に比べてましかな？」とか「これだけの祝福があるからいいかな？」と、どこかで妥協していました。イエスは私たちの心を見てください。一生懸命頑張っているあなたを、幸せになりたいと思って一生懸命頑張っているあなたを、こうすれば本当の満足を得るのではないかと一生懸命歩んでいるあなたを見てくださっています。でも残念ながら、私たちはそれらを得ることはありませんでした。

だから、この二つの動詞、「弱り果てる」「倒れる」は受け身です。どれ程頑張っても私たち自身が満足を得ることはなかった、逆に、そのような疲れや苦しみを得たのです。まさに、「羊飼いのいない羊のよう」です。なぜ、そのような状況に人間は置かれているのでしょうか？イエスは言われました。「羊飼いがいない」からです。羊飼いのいない羊をたとえにとって、その状況を説明しているのです。羊飼いのいない羊は途方にくれています。羊飼いは羊に栄養を与えて養います。羊は臆病な動物です。羊飼いは羊を守ってくれます。何の武器も備えていない羊を正しい方向に導いていきます。羊飼いのいない羊を思い描いてください。どのようにして食べ物を得ようか？どうやって外敵から自分を守ろうか？どちらの道を行けばいいのだろうか？と、羊飼いのいない羊のような歩みをしていたと…。イエスはそのような状態にあるあなたをご覧になって、あなたに深いあわれみを示されたのです。「かわいそうに思われた」のです。そのような神なのです。あなたの弱さもあなたの愚かさもちゃんと知って、あなたにあわれみを示してください。みことばを見ましょう。イザヤ書53：6「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」、1ペテロ2：25「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」。

ですから、見て来たように、イエスは人々の必要を満たそうとされて、あなたに一番必要な罪の赦しを備えてくださった、イエスはご自分のいのちをもってそのような行動を為してください、それはすべてあなたに対する深いあわれみが動機であったとみことばは教えてくれました。私たちの大牧者である主イエスは「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ10：11）です。

2. さばきへの緊迫感 : さばきが切迫していることを覚えておられた

もうひとつの動機は「さばきへの緊迫感」です。つまり、イエスはさばきが近いということをいつも覚えながらすべての働きをなさったのです。37節には「そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、…」とあります。「収穫」ということばは「刈り入れる、刈り取る」ということばで新約聖書に13回出て来ます。マタイ13章を見てください。畑に良い種を蒔いた農夫、でも、その畑に敵がやって来て毒麦を蒔いたという記事があります。13：30をご覧ください。「だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』」、収穫まで、まさに、刈り入れがなされるそのときです。39、40節には「毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。：40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。」と書かれています。旧約にもそのことが書かれています。ヨエル書3：12-14をご覧ください。「12 諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。：13 かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。：14 さばきの谷には、群集また群集。【主】の日がさばきの谷に近づくからだ。」。

ですから、イエスがここで「収穫は多い」と言われたのは「さばきの日」のことです。このような状況を描いてください。秋になって、穂が色づいてこうべを垂れている、すると、もうすぐ稲の刈り入れが始まると思います。まさに、そのことをイエスはここで言われたのです。「収穫は多い」というのは、もう穂が色づいている、十分に実っている、今、刈り入れてもいい状態になっているということです。そして、13章で見たように、「刈り入れる」とは終わりの日、さばきの日のことです。その日に神は良い麦と悪い麦とを分けられると言っているのです。

ですから、イエスはその当時、「収穫は多い、もう、稲は色づいている。いつでも収穫できる状態だ」と、つまり、さばきがすぐそこに来ていると言われたのです。主イエスは「神のさばきの日」が今にも

訪れるという危機感をもって働きを為しておられたと、そのことを私たちはここに見ることができるのです。もしかすると、私たちの働きにおいて欠けているのはそこではありませんか？私たちは私たちの愛する者たちがこの救いに与って欲しいと願って祈っている、でも、どこかでそのさばきが来るのはまだ先のことと思いませんか？イエスは人として、そのさばきがいつ起こってもいいように、その日を無駄にはしておられなかったのです。私たちは「明日がある」とどうして言えるでしょう？今日為すべきことをしなければなりません。イエスの生き様が私たちにそのことを教えてくれるのです。私たちも同じ思い、「神のさばきへの緊迫感」をもって今日を生きることが必要なのです。

C. キリスト者へのチャレンジ 37, 38節

ここには私たちクリスチャンへのチャレンジが書かれています。「:37 そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。:38 だから、収穫の主、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」、さばきが近づいているのに、働き手が少ないと言います。すなわち、主イエス・キリストによって備えられた完全な救いを伝える人々の不足の現実を明らかにしているのです。さばきが近いのにすばらしい救いを伝える人が少ない…と。信仰者の皆さん、余りに多くの人々が、あなたのもっている完全な罪の赦し、永遠の救いをもっていません。もっと言うなら、そのような祝福があることを知らないで永遠の滅びに向かっている人々が余りにもたくさんいるということです。彼らはみな、こんなにすばらしい救いがあるということを知って、意図的にそれを拒んで永遠の地獄に向かっているかという、そのような人も確かにいますが、その救いを知らないで滅びに向かっている人がたくさんいるのです。皆さんはそのことをよくご存じでしょう。イエスは言われます、「働き手が少ない。」と。その現状を明らかにした上で、主イエスは私たちに「宣べ伝えること」をチャレンジされます。

1. 主の命令

38節「だから、収穫の主、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」と、「祈りなさい」とイエスは言われます。しかも、これは命令形です。イエスはなぜこんなことを言われたのでしょうか？この働きにふさわしい人が必要だからです。神を愛し、みことばを愛し、イエスが歩まれたように歩もうとしている人たち、そういう人たちが必要なのです。「収穫の主」と書かれています。そして、「収穫のために働き手を送ってくださるように」と、収穫の主が喜ばれる人、収穫の主が送ってくださる人、そのような人を求めなさいと言います。というのは、今見て来ているように、この働きをするためにふさわしい人であることと同時に、神の働きをするためには神に働いていただかなければならないからです。神の働きは神の力で為さなければなりません。神によって救われた人は神によって備えられた力によって働きをしなければなりません。私たちに必要なことは、私たちの知恵や力ではなくて、神の力です。だから、祈るようにと言われたのです。

あなたの生活において、祈りはないがしろにされていませんか？形式的な祈りになっていませんか？ただ同じことを繰り返していませんか？ただ求めるだけになっていませんか？私たちが学んだように、「祈りは礼拝」です。私たちは祈ります。「神さま、どうぞ、あなたのみこころに適う人たちをより多く起こしてください。私たちの国には、この町には、あなたのことを知らない人たちがたくさんいます。あなたが喜ばれる働き人を起こしてください。そのような人々を送ってください。」と、そのように祈りなさいと言われるのです。主の栄光を現わす人たちが必要なのです。主を心から愛している人たちが必要なのです。主のみことばを愛している人たちが必要なのです。

私たちもよく祈りの大切さを話しますが、もしかすると、皆さんは祈りを忘れているかもしれません。愛する者の救いを願っていますが、救ってくださる主にではなく、教会にいる牧師や宣教師、伝道師と言う特別な働き人に救いを依存していませんか？彼らさえいてくれたら…と。また、自分のことばや豊かな知恵に頼っていませんか？私たち信仰者が頼るべきは神です。憶えているでしょう？「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」（使徒の働き1:8）、何のための「力」ですか？「わたしの証人」となるための力です。私たちに必要なことは、そのような力をいただいて、神のことばを語る人です。そのような人々が神によって遣わされることが必要なのです。

2. 主のチャレンジ

そのことを踏まえて、最後を見てください。「だから、収穫の主、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」、神のチャレンジは働き手を送ってくださるようにと願って祈ることですが、この後、10章ではイエスが12弟子を遣わしていかれます。先に4:23ではイエスが公の働きを始められたことを見ました。そして、この9章の終わりまで、弟子たちはイエスの働きを見て学んで来ました。そして、10章からイエスは彼らを送り出すのです。ということは、私たちがそのような働き人を送ってくださると祈るだけでなく、自分にこのように問い掛けなければいけないのです。「私はこのような働き人として働いていく覚悟があるかどうか」です。なぜなら、イエスはここで「さばきが近い。だか

らわたしが働きを為す。あなたたちの手は必要としません。」などと言われませんでした。敢えて、このように言われたのは、神は人々を救われますが、その救いを人々に与えるために私たちを使うということです。「働き手を送ってくださいと祈りなさい」と言います。ということは、人を通して福音のメッセージが伝わり、そのメッセージを神が使って人を救うのです。

主イエスは「宣べ伝える」という働きを、ご自分のいのちをもって贖った人たちに与えられました。問題は、あなたがそのために用いられたいと願うかどうかです。私たち信仰者が覚えることは、神は私たちをこの福音宣教のために用いてくださるということです。そのために私たちは救われているのです。その大切な使命をいただいていることを今一度覚えるときに、あなたは神の前に「神さま、私はその使命をしっかりと果たしたいです。神さま、どうぞ、私を用いてください。」と、そのように言える信仰者はこの中に何人くらいいるでしょう？神は私たちを使ってくださいなのです。

これまで私たちが学んで来たこと、それは、神は神の栄光を現わすためにあなたを生まれ変わらせてくださった。そして、神の力によって私たちは神のみこころを實踐できるということです。そして、神はここにみこころを教えてください。こうして生きていきなさい。主イエス・キリスト、その模範に倣って生きていきなさいと。そして、わたしが望んでいるのは、わたしのこのすばらしい完全な救いを伝える人々が起こされるように、あなたたちは祈り、願わくは、あなたたち自身がそのような働き人になることだと言われるのです。

皆さんはそのように願っているのでしょうか？それが神のみこころです。私たちもイエスのその行ないを見て、神の真理である聖書のことばをしっかりと語り続けていくのです。「御国の福音を宣べ伝え」というこの「宣べ伝える」というのは「伝令」のことです。王様の命令をそのまま伝えるという意味です。つまり、人としてイエスは何をされたのか？ご自分の好きなことを話されたのではありません。神のメッセージを正確に伝えたのです。その務めが私たちにもあるのです。人々は言うかもしれません。「礼拝で神のみことばを聞くときに、もっと楽しく、もっと面白ければ…」と。残念ながら、イエスはそのような働きをされていません。弟子たちもそのような働きをしていません。彼らがメッセージを語ったときに人々は神のことばに心が刺されたのです。私たちに必要なことは、人間の話ではなく、神のことばを伝えるのです。神が言われたことを正確に伝えていく、その務めが私たちの務めです。

信仰者の皆さん、イエスはこのようにして歩んで来られました。その模範に倣ってあなたも歩むようにと言われていています。私たちが考えるべきことは、どんなときにも神がお喜びになることを選択することです。自分よりも人々の必要に応じていくことです。でも、その働きをするときに、私たちは常に自分の心を吟味しなければいけません。本当に、主イエスのあわれみをもって私はすべてのことを為しているかどうか？私たちの為すことすべては、本当にさばきが近いという危機感をもってやっているかどうか？そして、「主よ、あなたを愛する者がもっと起こされますように、あなたのみことばを愛して、それを正しく伝える人たちが起こされますように」という祈りを為しているかどうか？

そして、最後に、「主よ、私をそのような人にしてください。」と祈っているかどうか？皆さん、ぜひ、考えてください。でも、みことばは私たちにそのように生きなさいと命じています。願わくは、ここにおられる愛する兄弟姉妹の皆さんひとり一人が「神さま、そのように生きていきたい。どうぞ、私を使ってください。一人でも多くの方がこの救いに与るように、この祝福に与るように私を使ってください。」と、その願いをもって、その祈りをもってこの一週間歩んでください。主が皆さんひとり一人を豊かに祝して用いてくださることを願います。

《考えましょう》

1. 人があなたに何をしようと、何を言おうと、主が喜ばれることをあなたが選択することが大切なのはどうしてですか？
2. 「御国の福音」を語るときに、あなたが語るべきことについて記してください。
3. 「収穫が多い」とは、どういう意味でしょう？また、どうすれば主がお持ちであった「危機感」をあなた自身、持ち続けることができると思われませんか？
4. 「働く人が少ない」という現実を踏まえ、あなたは何をしたいと願いますか？